

東北

古名

軒端梅

世阿弥作

前

ワキ

東国の僧

シテ

里女

後

ワキ

前に同じ

シテ

和泉式部

狂言

里人

季は地は
初春 京都

「年立ちかへる春なれや。／＼。花の都に急がん。

詞「これは東国方より出でたる僧にて候。我いまだ都

を見ず候ふほどに。此春おもひたち都にのぼり候。

道行

「春立つや。霞の関を今朝越えて。／＼。はてはありけり武藏野を。分け暮らしつゝ跡とほき。山また山の雲を経て。都の空も近づくや。旅までのどけかるらん。／＼。

詞「急ぎ候ふ程に。是はゝや都に着きて候。又これな

る梅を見候へば。今を盛と見えて候。いかさま名のなき事は候ふまじ。此あたりの人に尋ねばやと思ひ候。

狂言「シカ／＼。

ワキ詞

「さては此梅は和泉式部と申し候ふぞや。暫くながめばやと思ひ候。

シテ詞

「なふ／＼あれなる御僧。其梅を人に御尋ね候へば。何と教へ参らせて候ふぞ。

「さん候人に尋ねて候へば。和泉式部とこそ教へ候ひつれ。

シテ「いやさやうにはいふべからず。梅の名は好文木。又は鶯宿梅などゝこそ申すべけれ。知らぬ人の申せばとて用ひ給ふべからず。此寺いまだ上東門院の御時。和泉式部此梅を植ゑおき。軒端の梅と名づけつゝ。目がれせずながめ給ひしとなり。かほどに妙なる花の縁に。御経をも読誦し給はゞ。逆

シテ「さては和泉式部の植ゑ給ひし軒端の梅にて候ひけるぞや。又の方丈は。和泉式部の御休所にて候ふか。

シテ「中々の事和泉式部のふしどなりしを。作りもかへず其まゝにて。今に絶えせぬ詠めぞかし。
ワキ「ふしごやさては古への。名を残しおく形見とて。

シテ 「花も主を慕ふかと。年々色香もいやましに。

ワキ 「さもみやびたる御氣色。

シテ 「猶もむかしを。

ワキ 「思ふかと。

地 「年月を。古き軒端の梅の花。く。あるじを知
れば久方の。天ぎる雪のなべて世に。聞えたる名
残かや。和泉式部の花ごゝろ。

ロング地 「げにや古へを。聞くにつけても思ひでの。春や昔

の春ならぬ。我身ひとりぞ心なき。

シテ 「ひとりとも。いさ白雪の古事を。誰に問はまし道

芝の。露の世になけれども。此花に住むものを。

地 「そもそも此花に住むぞとは。とぶさに散るか花鳥の。

シテ 「同じ道にと帰るさの。

地 「先だつ跡か。

シテ 「花の陰に。

地 「やすらふと見えしまゝに。我こそ花の主よと。夕

ぐれなるの花の陰に。木がくれて見えざりき。木
がくれて見えずなりにけり。 (中入)

ワキ歌

「夜もすがら。軒端の梅の陰に居て。く。花も妙
なる法の道。迷はぬ月の夜と共に。此御経を読誦
する。く。

後ジテ
「あらありがたの御経やな。あらありがたの御経や
な。唯今読誦し給ふは譬喻品よなふ。思ひ出でた
り闇浮のありさま。此寺いまだ上東門院の御時。

御堂の閑白この門前を通り給ひしが。御車の内に
て法華経の譬喻品を高らかに読み給ひしを。式部
この門の内にて聞き。門の外法の車の音きけば。
我も火宅を出でにけるかなと。かやうによみし事。
今の中から思ひ出でられて候ふぞや。

「げにく此歌は。和泉式部の詠歌ぞと。田舎まで
も聞き及びしなり。さては詠歌の心の如く。火宅
をばはや出で給へりや。

ワキ詞

シテ「中々の事火宅は出でぬさりながら。よみおく歌舞の菩薩と為りて。

ワキ「なほ此寺に澄む月の。

シテ「出づるは火宅。

ワキ「いまと。

シテ「すでに。

地「三界無安の内を去りて。三つの車に法の道。すはや火宅の門を今ぞ。和泉式部は成等。正覚を得る

ぞ有難き。

地クリ

「それ和歌といつぱ。発心説法の妙文たり。たまく後世に知らるゝ者はたゞ。和歌の友なりと。貫之もこれを書きたるなり。

シテサシ

「かるが故に天地を動かし鬼神を感じしむる事業。「神明仏陀の冥感に至る。殊に時ある花の都。雲井の春の空までも。のどけき心を種として。天道にかなふ詠吟たり。

「所は九重の。東北の靈地にて。王城の鬼門を守りつゝ。惡魔を払ふ雲水の。水上は山陰の鴨河や。すゑ白河の波風も。いさぎよき響きは。常樂の縁をなすとかや。庭には池水をたゝへつゝ。鳥は宿す池中の樹。僧は敲く月下の門。出でに入る人跡かづくの。袖をつらね裳裾を染めて。色めく有様は。げにくく花の都なり。

「見仏聞法のかづく。

地「順逆の縁はいやましに。日夜朝暮に怠らず。九夏

三伏の夏たけて。秋来にけりと驚かす。澗底の松の風。一声の秋を催して。上求菩提の機を見せ。

池水にうつる月影は。下化衆生の相を得たり。東北陰陽の。時節もげにと知られたり。春の夜の。

(序の舞)

「春の夜の。闇はあやなし梅の花。

地「色こそ見えね香やは隠るゝ。香やは隠るゝ。く。

シテ 「げにや色に染み香にめでし昔を。

地 「よしなや今更に。思ひ出づれば我ながらなつかしく。恋しき涙を遠近人に。洩らさんも恥かしいとま申さん。

シテ 「これまでぞ花は根に。

地 「今は是までぞ花は根に。鳥は旧巣に帰るぞとて。方丈のともし火を。火宅とや猶人は見ん。ここそ花の台に。和泉式部がふしどよとて。方丈の室に入ると見えし。夢はさめにけり。見し夢はさみて失せにけり。